

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第129号 会 報 1990年8月20日

目 次

	頁		頁
I 第88回総会ならびに講演会の案内	1	*新入会員	3
*会場及び周辺略図	2	III 第16期学会役員選挙日程及び立候案内	3
*最寄りのホテル等	2	IV 寄稿「中国みやげ話三題」	4
II 運営委員報告	3	V 研究助成金案内	6

I 第88回総会ならびに講演会の案内

第88回総会ならびに講演会は東京大学理学部地球物理学教室のお世話で11月19日(月)~21日の3日間大宮ソニックシティビル市民ホール集会場及び会議室で開催する。

講演申込・予稿原稿送り先及び申し込み要領

☆地球内部および月・固体惑星関係

〒606 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部地質学鉱物学教室 鳥居雅之 宛

☆太陽・惑星間空間および地球・惑星電磁圏関係

〒606 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部地球物理学教室 寺沢敏夫 宛

☆地球・惑星大気圏関係

〒442 豊川市穂の町3-13
名古屋大学空電研究所 近藤 豊 宛

1. 締切日は10月6日(土)必着です。締切日以降に到着した申込は自動的に却下いたします。電話やFAXによる申込や遅延依頼は受け付けません。

2. 講演申込用紙への記入(氏名・所属・講演題目など)は、プログラム編集・印刷の都合上必ず日本語でお願いいたします。なお外国人の氏名はアルファベット表記でもさしつかえありませんが、所属はできるだけ日本語で表示して下さい。

3. 非会員のみによる講演申込は受け付けません。筆頭著者(ファーストオーサー)になれるのは1人1講演に限ります。ほは同じ内容の講演を、筆頭著者だけを取り

替えて複数の講演として申し込むのはおやめ下さい。

4. 予稿原稿は、同封用紙にワープロで印刷されるか、あるいは黒色のインク、ボールペンなどで丁寧に手書きして下さい。ワープロで同封用紙に直接印刷するのが困難なときは、無理に張り付けたりせずに、規定の枠にようにB4用紙に鮮明にコピーなどされても結構です。

5. 予稿本文が日本語の場合は、枠に規定されているように2段組にされると、印刷後読みやすくなります。

6. プログラム編集を迅速に行えるように、予稿原稿のコピーを必ず1部同封してお送り下さい。

7. 口頭発表の時間は15分(講演12分、質疑3分)以内です。

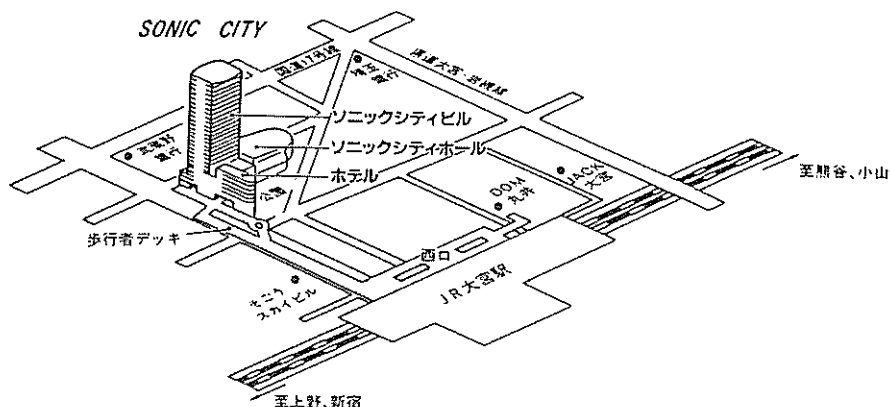
8. 限られた会期を有効に利用するために、ポスターセッションに特に分野を定めずに約50件の発表を予定しておりますので、奮ってお申込下さい。ポスター発表・口頭発表の区分はご希望にできるだけ従いますが、プログラム構成の都合上ご希望の区分以外での発表をお願いすることがありますので、ご協力下さるようお願いいたします。

9. ポスターの掲示板は、縦180cm、横90cmのベニヤ板1枚です。画紙・セロテープなどは会場に用意いたします。

10. 緊急の話題のために、約5件のポスタースペースを確保いたします。発表希望者は4月5日までに関係のプログラム委員に申し込んで下さい。

11. 各セッションの座長を2名とし、講演会の進行を能率的に進めていきたいと思っておりますので、ご協力お願いいたします。

*会場及び周辺略図



財団法人 埼玉県産業文化センター

〒331 埼玉県大宮市桜木町1-441
TEL 048-647-4111
FAX 048-647-4159

○大宮駅西口から歩行者デッキで徒歩3分

* 最寄りのホテル等

ホテル名	住所・電話	部屋数・料金	備考
パレスホテル大宮	〒331 大宮市桜木町1-441 TEL(048)647-3300	T/B 50 ¥9,300 S/B 100 ¥11,000	JR大宮駅西口徒歩4分 (学会場と同じビル)
マロウドイン大宮	〒331 大宮市桜木町2-173 TEL(048)645-5111	T/B 20 ¥6,100 S/B 125 ¥7,100	JR大宮駅西口徒歩4分 (学会場へ徒歩3分)
バイオランド ホテル	〒330 大宮市宮町1丁目35-2 TEL(048)648-0010	T/B 10 ¥7,010 S/B 60 ¥7,520	JR大宮駅東口徒歩3分 (学会場へ徒歩7分)
バイオランド ホテル新館	〒330 大宮市高鼻町3-155 TEL(048)648-0011	T/B 18 ¥6,000 S/B 10 ¥6,600	東部・北大宮駅徒歩5分 (東部野田線利用2分大宮下車)
新道山家	〒330 大宮市堀の内3-110 TEL(048)641-0501	和室 16 ¥6,500	
大宮国体記念会館	〒330 大宮市寿能町1-4 TEL(048)643-1515	和室 ¥5,000	
ホテル メトロポリタン	東京都豊島区西池袋1-6-1	T/B 421 ¥12,800 S/B 304 ¥14,900	JR池袋西口徒歩5分 (JR埼京線通勤快速25分大宮下車)
ザシャインティ プリンスホテル	東京都豊島区東池袋3-1-5	T/B 665 ¥13,500 S/B 414 ¥15,600	JR池袋東口徒歩8分 (JR埼京線通勤快速25分大宮下車)

II 運営委員会報告

第157回運営委員会（7月26日、東京大学地震研究所第3会議室）の主な議題、報告、決定事項は次の通りである。

第88回（1990年秋）大会について、会場の準備状況等が担当（東大理学部）より報告され、申込の締切等開催に至るまでの日程及び大会の運営が討議・決定された（本会報I参照）。

地球惑星科学関連学会の合同大会とすることが決まっている第89回（1991年春）の大会は予定通り共立女子大学を会場として開催される。期日は4月2日（火）～5日（金）の4日間。4月1日には都内でMULTIERシンポジウムの開催が予定されている。関連事項として、地球惑星科学関連学会連絡会が設置された。連絡会は長期的な視野にたつて関連学会間の情報交換を行い、緊密な交流を促進することを目的とする。現在、構成学会は地震学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、日本火山学会、日本地球化学会であるが、他の関連学会へも呼びかけが行われている。本学会から3名の連絡員（福西、本蔵、浜野）を決めた。来年春の合同大会ために実行委員会が別途組織される予定である（本学会の世話役担当機関として東京大学海洋研究所及び地震研究所が予定されている）。

次期学会役員選挙及び学術会議会員候補者及び推薦人の選挙（詳細は11月発行の会報）の日程、方法について討議・決定した（本会報III参照）。

学会基金の有効利用として提案された国際学術交流事業について議論が行われた。

新入会員12名が承認された（下記）。

*新入会員

1990年4月以降運営委員会で承認した新入会員は次の12名の方々である。

(正会員)

- 小林 敬生 郵政省通信総合研究所
- 野澤 悟徳 名古屋大太陽地球環境研究所
- 前里 卓 宇宙技術開発システム技術本部

(学生会員)

- 田部 井隆雄 高知大学理学部
- 三澤 浩昭 名古屋大空電研究所
- 伊藤 清 東京大学理学部
- 村田 功 東京大学理学部
- 米村 正一郎 東京大学理学部
- 井岡 昇 愛媛大学理学部
- 竹内 徹 名古屋大学理学部
- 金松 敏也 北海道大学理学部

(海外会員)

Bijaksana Satria Indonesia

学会会員数（1989年8月現在）

正会員	学生会員	名誉会員	賛助会員	外国会員
527	107	6	20(35口)	54

III 第16期学会役員選挙日程及び立候案内

本学会役員選挙内規に基づき、下記日程により第16期役員選挙を実施いたします。前回より評議員及び運営委員選挙は立候補制となりました。本学会のために活躍していただける方々であれば立候補、あるいは推薦により立候補を促して下さることを歓迎いたします。

正会員は他の正会員2名の推薦により評議員あるいは運営委員に立候補する事ができます。立候補者は、氏名、年齢、勤務先、研究分野（20字以内）と推薦者名を記入した書面を、10月13日まで（必着）に行武会長宛にお送り下さい。ただし、推薦者の印鑑等は必要ありません。11月初め発行予定の選挙広報に、立候補者一覧と各候補者による上記情報を添えて掲載いたします。なお正会員は複数の候補者の推薦人になることができます。

記

- ・評議員、運営委員立候補受付締切
：10月13日（土）
(宛先は会長)
- ・選挙広報、投票用紙発送：11月初め
- ・投票締切
：12月10日（月）
(宛先は学会事務センター)

1990年 4月 17-20日に、中国の上海市で International Symposium on Geomagnetism が上海市地震局主催、国家地震局共催、中国地球物理学会・上海地球物理学会ならびに IAGA後援で開催された。このシンポジウムに列席した筆者は、『近年地震予知計画推進に関連して広大な領土内に数多く設けられた観測点で得られる地磁気変化記録を利用して、中国人研究者が中低緯度地域における地磁気変動の研究にも今後大いに貢献するようになることを期待しています』と希望を述べた。今回の中国訪問に際して私が得た新知識をここに会員各位のご参考に供する次第です。

1. 中国における地磁気観測点の配置

中国で最も古い地磁気観測所は、上海市郊外にある余山観測所である。実は『余』の字は間違っており、正しくは屋根の下に『示』と書くことに注意された。しかしそのような字は我が国では使われていないので、ここでは誤りを承知の上で余山と記した。昔から親しまれていた Zo-Se は古い現地流の読み方で、現在では Sheshan と呼ばれている。この観測所の前身は 1874 年にフランス人宣教師によって上海市内の徐家匯 Zikawei に設置され、その後 1905 年に陸家浜 Lukiapang に移り、1935 年に再度移転して現在の地に観測所が定着した。1957-58 年の国際地球観測年を機に中国では、北京 Beijing・長春 Changchun・広州 Guangzhou・拉薩 Lhasa・武漢 Wuhan・蘭州 Langzhou・烏魯木齊 Wulumqi の 7ヶ所で地磁気連続観測が開始された。上記の 8 観測所は "Old Eight Stations" と呼ばれていて、国際観測資料交換の任を果たしている。

1966年から1981年にかけて、地震予知の研究を推進するために国家地震局は 169ヶ所の地磁気観測点を設置した。このうち 17ヶ所の 1等観測点は標準磁気機・プロトン磁力計と三成分変化計を備えており、26ヶ所の 2等観測点には偏角計・一成分用プロトン磁力計と三成分変化計が置かれている。残り 126ヶ所の観測点には、局地的な地震の発生をモニターするに役立つ簡単な装置（プロトン磁力計か Z 成分変化計、あるいは両者）が置かれている。

2. 『石へんに並』は中国では『磁』とは全く別の字

画数が多かった漢字を戦後簡略化するようになってから『磁』の字を『石へんに並』と書く人がかなり多く、私自身もその一人である。今回の訪中の折、『石へんに並』は中国では『磁』とは全く異なる別の意味（ぶつかる、触れ

る）を持つ漢字であることを知った。たぶん、頭を頭、瀧を濕、と書くようになった類推で、茲を並に置き換えていたのであろう。観光地として有名な蘇州の虎丘塔（ピサの斜塔のように傾いている）のそばに傾斜測定器の台座となる石柱があり、この石柱の前面に大きく『請勿磁動』と彫ってあった。そこで私は『磁動とはどんな意味ですか？』と案内人に聞いてみて、磁が磁とは全く別な文字であることをはじめて知った次第です。今まで 40 年以上も『磁』を『石へんに並』と書き続けてきた私の癖は今後ともつい出ることが多いのではないかと考えています。

3. 『中国古代天象記録総集』の刊行

古代から 1911 年に至る間（中華民国成立以前）に中国各地で保存されていた歴史的な天象観測記録を調査収集し刊行しようという大計画が 1974 年以来中国科学院の下ですめられていた。1980年には既に資料収集作業は殆ど終了していたが成果刊行はかなり遅れ、1988年7月に『中国古代天象記録総集』と題する大著（B5判、1114頁；定価 25元）として江蘇科学技術出版社から刊行された。この本に集録されている事項および各事項に費やされている頁数をあげると、下記のようになっている。

太陽黒点 24, 極光 36, 隕石 60, 日食 140,
月食 90, 月掩行星 20, 新星および超新星 11,
彗星 194, 流星雨 42, 流星 466頁 と 附録
（異常曙暮光、日月変色、雨灰、雨黒子）17頁

これらの膨大な天象記録は歴史時代における太陽活動の変遷を研究する上にも貴重な資料であろう。この『中国古代天象記録総集』に掲載されている太陽黒点観測記録は、西暦紀元前28年から1874年までの約1900年間に総計 283例（1世紀あたり平均約15例）あげられている。そのうちいわゆる Maunder minimum と呼ばれる時期（A.D. 1645-1715の70年間）には太陽黒点観測記録が16例もあるので、それらの史料を詳しく検討してみる必要があらう。

中国における極光観測史料を調査して、同じ日に欧州でもオーロラ出現が記録されている例（たとえば西暦1138年10月6日に、中国では杭州、欧州ではボヘミア地方で）が見つかり、当時は地球の磁軸が北半球では北極から見て中国側に傾いていたであろうとの証拠が得られた（JGG, 20, 45-50, 1968; 科学 39, 321-326, 1969）。この研究の基本アイディアは、1963年に永田武先生が出され、当時金沢大学教養部におられた廣松光雄教授（東洋史専攻、1976年没）に中国の古文書からオーロラの出現を報告しているのではないかとと思われる記事を拾いだしていただき、私は欧米のオーロラ出現カタログと比較する作業を担当した。

ところで中国古代天象記録総集に記載されている極光観

察記事の数は、慶松教授が見出した事例の半数以下にすぎない。このようになった理由は、中国で刊行された本では『疑わしい記事は除外する』方針が採用されており、一方慶松教授は『疑わしくてもこのような記事が見付かったという貴重な事実を指摘しておく』立場で史料調査に臨んだからである。中国で極光をあらわしたのではないかと考えられる語として、赤氣・白氣・竜・旗・織または布・矢・奇星などに加えて『天狗』もその一つではなかろうかと慶松教授は語っていた。同教授の調査結果によると、『天狗』の語が使われている事例は B.C.158 - A.D.1126 の間の記録に僅か17例あるだけで、その後この語は中国における天象記述文には一切現れなくなっている。一方我が国で『天狗』の文字が初めて現れた文献は日本書紀で、舒明天皇九年（A.D. 637年）に書かれた記事であるといわれている。仏教伝来にともなって『天狗』の語も中国から来たのであろうが、日本では独自の『天狗』が生まれてきたことはまことに興味深い。新刊の中国古代天象記録総集に掲載されている極光記録（不確実と判定された記事をも含めて）では、『天狗』という語を含む記事は一つも取り上げられていない。これまで地球磁場経年変化についての話をするたびに天狗に関する脱線話を入れることを楽しみにしていた私は、この巻の極光史料編纂責任者達が『天狗』はオーロラとは全く無縁であると断定した理由を是非聞かせてくださいと質問状を出してみた。

この質問に対する返事はすぐに来た。古代天象記録編纂責任者は、『天狗』をオーロラとは全く考えずに、流星ではないかと想像しているという。そこで『流星』の項（中国古代天象記録総集の4割強の頁を占めている）を調べてみると、たしかに慶松教授が指摘された『天狗』の語を含む記述文が多く掲載されている。私が『流星』および『流星雨』の項に掲載されている記事にざっと目を通した感想を率直に言わせてもらえば、記述文の中にもかく『星流る』とか『星隕つ』という句さえ入ってれば、たとえ記述が流星とは思えないようなものであっても（たとえば緩行、委曲蛇行、炎如火、蟠曲如竜、如飛如織、天星往来如織、乱星縦横如織、流星大如拳、流星大如瓜、流星大如象・尾是蛇形、流星色赤如桃、天中裂、大流星如数斗器、大星如炬火、星隕如虹など、流星に対する記述としては不自然な表現が含まれていても）『流星』の部類に入れてしまっている。また『流星雨』として拾いあげられた記事は、すべて『星隕如雨』か、『大小流星数百』、『衆星交流』のような句が記述文中に含まれているものに限られている。折角貴重な天象記録史料を、このようにいくつかの限られた文字の有無だけで安易に分類しているような事例が多いことを指摘せざるを得ません。『中国古代

天象記録総集』を今後利用される方々は、この本の半分近くの頁数を占める『流星・流星雨』の中にはオーロラをあらわしていると思われるような記事がかなり多く含まれていることに留意していただきたい次第です。

古文書を調査して必要な情報を取得するためには、調査を担当する者自身が所要事項に関連する十分な知識を予め備えており、しかも欲しい情報を捜し出すという気迫をこめて調査にあたる必要がある。そうでないと、折角宝の山に入っても全く収穫に恵まれない結果に終る可能性が大きい。（完）

V 研究助成金案内

下記の研究費助成案内が来ています。 推薦を必要とする場合は会長までご連絡ください。

援 助 名	申 込 期 限
東レ科学技術研究助成 第31回(平成2年度) 学会推薦を必要とする	独自の萌芽的研究を活発に行っている若手研究者、またはそのグループ 1990年10月11日
日産学術助成 第17回(平成2年度)	人間と機器の係わりに関する研究 自然環境および都市環境に関する研究 1990年 8月31日
所定申請用紙にて学会会長へ提出 〒163 東京都中央区銀座6丁目17番2号 申請用紙申込: 下記送料を添えること 250円(1部)、360円(2~3部) (財)日産科学振興財団 TEL(03)543-5597	

<<会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿、お待しています。>>
 会長、総務、庶務までご連絡下さい。

会長 行武 毅 東京都文京区弥生1-1-2 東京大学地震研究所
 電話 03-816-3795 FAX 816-1159
 総務 浜野洋三 東京都文京区弥生2-11-16 東京大学理学部地球物理教室
 電話 03-812-2111(内)4293 FAX 818-3247
 庶務 林 幹治 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学部地球物理研施設
 電話 03-815-8020 Fax 818-0745
 電子メール d32758@tansei.cc.u-tokyo.ac.jp
 d32758@TOKYO

地球電磁気・地球惑星圏学会
 〒113 東京都文京区弥生2-4-16
 学会センタービル
 (財)日本学会事務センター内
 電話 (03)817-5801
 FAX (03)817-5800